

謡曲『花筐』

はな がたみ

大昔(一五〇〇年前)味真野で仲むつまじく暮らしていた男大迹王と照日の前の愛の物語…

第二五代武烈天皇は若くして亡くなったので、跡継ぎがありませんでした。次期天皇には越国(後の越前国)におられる、応神天皇五代の孫で

人柄もいい男大迹王を迎えることになりました。急なことであったので王は、手紙と花かご(花筐)を形見として照日の前へ残し、都へ上られたのです。

味真野に残された照日の前は、泣き暮らす毎日でした。気が狂うほどに王への思いは募るばかりです。そうするうちに照日の前は形見の花筐を持って、遠い遠い都へ向かうのです。

都へ上った王は第二六代継体天皇となります。あるのどかな秋の日、天皇は大勢の供を連れて紅葉狩りに出かけました。

その時、花筐を抱いた女性に出会います。味真野から来た照日の前です。彼女は天皇の前で花筐を持って美しく舞います。天皇は照日の前との再会を喜び、彼女の健気な心にうたれます。

その後、天皇と照日の前は味真野での生活と同じように、都でも仲良く幸せに暮らしたのでした。

継体天皇



天皇家の系譜



「日本書紀」によれば継体天皇は即位前、男大迹王と呼ばれていました。父親は彦主人王(近江国高島郡三尾)で、母親は振媛と言われています。幼少のおり父親が亡くなり、それ以後は母親の故郷である高向(現在の福井県坂井市丸岡町)へ帰ったと伝えられています。

その後、58歳の時に第26代天皇として即位したとされています。継体天皇の没後は、子どものうち3人がそれぞれ天皇として即位(第27〜29代)し、第33代推古天皇は孫、聖徳太子はひ孫にあたります。

